

自由集会 4 (AW2)

野生チンパンジー研究の 50 年—長期研究の重要性と今後の展望

Fifty years of research on wild chimpanzees: Significance and future of long-term re-search

開催日時：2015 年 7 月 18 日（土）15:45-18:15

会場：ホール A (国際交流ホール I)

タンザニア、マハレ山塊での野生チンパンジーの研究が開始されてから今年で 50 年を迎える。本自由集会では、この記念すべき機会に、マハレでの 50 年間の研究成果を紹介するとともに、長期研究でこそ見えるものと今後の長期研究の展望について議論したい。

多くの霊長類は成長が遅く寿命が長い。このため、成長に関するパラメータや繁殖成功、社会変動などを知るためには長期研究が欠かせない。たとえば、初期に想定されていたよりもチンパンジーの寿命が長く、繁殖年齢も意外なほど長いことが長期調査によって明らかになっている。また、子殺しや新奇行動の発現など、興味深いものの稀にしか生じないような行動を理解する上でも長期調査は重要である。

日本の霊長類学は、当初から長期研究を志して開始された。現在の若手・中堅の世代の多くは、そうした先人たちの積み重ねに負っている。そして、そうした世代は、数十年間に蓄積されたデータを有効利用できるという恵まれた立場でもある。一方で、どのように調査地の継承・継続をしていくのかといったことは、今後多くの調査地で問題になりうる。

霊長類の長期調査地は、関連の研究分野にとっても可能性のある所となりうる。たとえば、多くの調査地は多様な生物が暮らす場所でもあるので、霊長類以外の動植物種の研究や種間関係の研究などを展開することも可能であろう。また、生物多様性の理解やそれに基づく保全戦略、密猟・伐採などの影響、地域社会保全などを考える上でも、調査基盤や地域との関わりが確立された長期調査地はポテンシャルが高いはずである。

この自由集会では、マハレでの長期研究を例にしつつ、霊長類学における長期野外研究一般の重要性と課題、および今後の展開について議論したい。

予定プログラム

- ・趣旨説明
- ・個別報告（3～4 件ほど）
- ・コメント
- ・総合討論

主催：

企画責任者：中村美知夫（京都大・野生動物）、保坂和彦（鎌倉女大・児童）、伊藤詞子（京都大・野生動物）、座馬耕一郎（京都大・アア地域研）

Organizer: Michio NAKAMURA (Kyoto University), Kazuhiko HOSAKA (Kamakura Women's University), Noriko ITOH (Kyoto University), Koichiro ZAMMA (Kyoto University)

連絡先：

中村美知夫

〒606-8203 京都市左京区田中関田町 2-24 京都大学関田南研究棟 京都大学野生動物研究センター e-mail:

nakamura@wrc.kyoto-u.ac.jp